二つの国

――「靖国」の問題をめぐって――

中川皓三郎

はじめに

真宗・大谷派なる教団が、親鸞その人が、身をもって顕かにした浄土真宗という仏道を、この現代という時代・社会に「真宗同朋会」運動として展開するなかで直面することになった課題は、①教団問題、②部落差別問題、③靖国問題であったと教えられている。[1] そして、現在もそれらの問題から問われ続けているのだが、そのなかで今回「靖国」の問題をめぐって、そこにある課題を明らかにしてみたいと思う。とくに私たち日本人にとって「靖国」の問題は、なかなか課題化できないというところに、日本人にとっての本質的な問題が孕まれているのではないかと考えるからである。

一、「靖国」という言葉について

明治維新の戦闘で傷つき亡くなっていった官軍の兵士たちの「霊を、国が手あつく祀り鎮める」[2]ために一八六九（明治二）年に建てられた東京招魂社が、一八七九（明治十二）年に靖国神社と改められるとき、天皇の言葉として

となえられた「靖国神社改称列格の祭文」と言われるもののなかに次のような言葉が出ている。

明治元年と云年より以降、内外の国の荒振寇等を刑罰め、不服人を言和し給ふ時に、汝命等の赤き直き真心を以て、家を忘れ身を擲て、各も死亡にし其大き高き勲功に依てし、大皇国をば安国と知食す事ぞと思食すが故に、靖国神社と改称へ、別格官幣社と定奉りて、御幣帛奉り斎奉らせ給ひ、今より後、弥遠永に、怠る事无く祭給はむとす。故是の状を告給はくと白給ふ、天皇の大命を聞食せと、恐み恐みも白す。

（村上重良『靖国神社　岩波ブックレットNo.五七』一一一頁）

おおよそその意味するところは、靖国神社とその名を改めて、天皇の国であるこの日本の国を安らかな国として成り立たせるために、「家を忘れ身を擲て」死んでいった者たちを、永遠に神としてお祭りしていきますということだが、ここに「安国」という言葉が語られている。そして、村上重良は、

安国、護国（鎮護国家）を避けてあえて新語を選んだのは、安国、護国が仏教のことばとして久しく定着していたからであろう。

（前同一五頁）

とも言われているが、「靖」は『大字典』によれば、「会意。立てる姿の安静なること。故に立扁。青は音符。転じて広く安シ・和グ・治ム・静カ等の義とす。」とあり、文字の意味から言っても、「靖国」は「安国」ということである。

すると阿弥陀仏の浄土も『大無量寿経』で「安楽国」③とか「安養国」④とかと呼ばれているのだから、文字そのものから見て「靖国」と阿弥陀仏の浄土の両者は、その問題領域を同じくしていると言えるのではないかと思う。そして、その同じくする問題領域とは「国」ということであり、「安国」ということである。

二、人間は国をもとめて流転している

安田理深は、『浄土の教学』という講演のなかで次のように語っている。

だからこういえるでしょう。人間は国をもとめて流転している。国ということが魂の安んずるところでしょう。つまり、そのファーターラント（Vāterland祖国・故国・本国）でしょう。我々のホームじゃないかね。故郷じゃないかね。それを忘れとったんだ。だから国をもとめる。しかし国をもとめて実現してみるとあわんです。国が実現されてきた。みんな国を実現してきたんだから、独裁国家というのも、封建国家というのもね。資本主義国家というのも、マルクスのいう、これは一国共産主義やわね、そういうのも、みんな国をもとめてきたんでしょう。願ってきたんです。

けれど実現してみたら願いと違う。じゃああきらめるか、あきらめられない。でてきたものは、願ったのと違うけど、でてきたものであきらめるわけにはいかない。もういっぺんこころみてみようと。それでまた、でてきたものはだめかもわからん。知らんけど、またこころみてみよう。あきらめるわけにはいかん。そういうものを国というんです。あきらめられんものや。

（真宗大谷派刊『教化研究』八七号・六五頁）

少し長い引用になったが、ここで語られていることは、人間が生きるということと「国」ということとが本質的に深く結びついているということである。それはどういうことかというと、人間というものが一人で生きていないということである。このことは「個人が衆生としてあるということである⑤」と語られ、「私たちは自己存在であると同時に関係存在である⑥」とも語られ、また「人間は、それぞれ個人であるが、単なる個人として一人で生きることができるのではなく、『人と人との間』というものをもつことで、初めて人間として生きることのできる存在である⑦」等々と種々の表現で語られていることでもある。

またそのことは、仏陀・釈尊が「縁起の法」（「此有るとき彼有り、此生ずるより彼生じ、此無きとき彼無く、此滅するより彼滅する」と定型的に説かれている。）として顕かにされたことでもあるのだが、清沢満之が「万物一体」のなかで、

宇宙間に存在する千万無量の物体が、決して各個別々に独立自存するものにあらずして、互に相依り相待ちて、一組織体を成すものなることを表示するものなり。（清沢満之全集六・五頁）

と語っているように、自分以外の一切のものを内容として「私」が在るということを意味している。

だから人間は、

最近になっていよいよ思うことですけども、人間、――衆生といってもいいんですが、一応人間として限定するならば、一切の人間はもともと一体なんでしょうね。もともと生命においては一体なものが、個々それぞれの違ったかたちをとって分裂している。しかし分裂したままで実は統一されている。だから分裂した私達は、その本来的統一に帰らなければ、人間として生まれて来た生命の意義を尽くすことができないのです。

（信国淳「師を求めるこころ」信国淳選集四・二八五頁）

という課題を持つものなのである。

なぜなら『阿弥陀経』が語る阿弥陀仏の浄土である「極楽世界」に住むという「共命之鳥」の物語[8]がよくそのことを教えてくれているように、私たちいのちを生きるものは、共に生きるということが成り立たなかったら一人一人の生きるということも成り立たないものだからである。そして、「人を摂するの所、之を目づけて国と為す[9]」とあるように「共に生きる」ということが成り立つところが「国」なのであるから、人間は国を求めて生きているのである。国を見出すことができて初めてこの「私」の生きるということが安定するからである。

だからまた、

浄土は、人間の構造に基づいていわれるのである。人間には必ず国土という問題がある。国土をもったときに人間は初めて安んずるのである。

（安田理深「『願生偈』聴記」安田理深選集一二・九一頁）

と語られているのである。

三、何に依って「共に」ということが成り立つのか

個人的な体験を語ることになるが、私自身が大谷専修学院に勤めていたとき、韓国の方から親鸞聖人の教えを学びたいということで毎年一人ないし二人の人が入学してこられる時期があった。韓国からやってこられた学生を迎えての最初のミーティングを持ったとき、私たちが今までお互いの国籍を確かめ合うこともなく、また当然のように日本語というものを前提にしてミーティングを行なっていたのだなということに気づかされることがあった。

とくに日々の生活のなかで、こうしなさい、ああしなさいと日本語で指示されるところに、韓国からやってきた学生にとっては自分の感情を逆なでされるような何かを感じてイライラされることがあった。どうしてかということがなかなか分からなかったが、よくよく考えてみると先の太平洋戦争のとき、私たち日本人が朝鮮・韓国の人たちに大変な苦しみをあじあわせてきたという歴史があるわけで、私たちが何気なしに語っている日本語が、韓国からやってきた学生にとっては特別な響きを持って聞こえるということがあったのである。

このような体験を通してあらためて気づかされたことは、私たちは誰もみな例外なしにある前提というものをもって生きているということである。この私ならば日本語を「母のことば」とする日本人ということである。

四、「母のことば」

ではそこに何があるのだろうか。

真宗・大谷派の『中央同朋会議・報告Ⅱ　親鸞の教えと現代』のなかで、高史明が、

ぼくの方の個人的な問題としてはこうなんですね。朝鮮人の一世が日本に来ておりまして、朝鮮で自我が成立するまで、十歳ごろまで生活していた。そしてまぁ日本に来て、いわば知識人になっている。そしてそういう人た

ちが自分とは何かと考える。そうして、自分の中を掘っていくと、最初に出会った言葉に象徴される朝鮮の環境にぶつかる。だから強烈な故郷志向が、もう居ても立ってもおられないぐらいの故郷志向が出てくるわけですね。

（略）とにかく表現が強烈ですよ、その人たちは。とにかく全部捨てても、行きたい帰りたい、それが自分ということですよ。日常を超えた自分だと、こういうことなんです。もしそれが知識を超えた自分だとすりゃ、ぼくはそこに、同じとこに立てないですよね。そこの日常を超えた自分というところで善し悪しと言っているのが、人知による善し悪しだと、この頃ぼくは気づいたのです。（『中央同朋会議・報告Ⅱ　親鸞の教えと現代』一〇〇頁）

と語り、また「一番最初に出会った言葉がですね、死ぬ間際になって出てくる。[10]」「ここを基準にしているのが人知の一番深いところです。人知のここを基準にして、善し悪しを決めていくというのが、天皇制の根だと、ぼくはそう思うんですよ。[11]」とも語られている。

「一番最初に出会った言葉」とは、「乳を吸わせる母親と乳を吸う子供とのあいだには、同時にことばを話しかける母親と聞く子供との関係が必ずあった。こどもが全身の力をつくして乳を吸いとると同時に、かならず耳にし全身にしみとおるものは、またこの母のことばであった[12]」と語られる「母のことば」というものである。それはまた「生まれてはじめて出会い、それなしには人となることができない、またひとたび身につけてしまえばそれから離れることのできない、このような根源のことば[13]」と言われるものである。

だからこのような「母のことば」のところには、「母から同時に流れ出す乳とことばという、この二つの切りはなしがたい最初の世界との出会い[14]」と語られているように、「母のことば」が象徴する世界と溶け合った「私」が存在するのである。だからまた「母のことば」で意識された「私」のところに一番安定した生があることになるのである。

先の戦争が終わるときに、いろいろな事情のなかで中国人の家庭に預けられることになった「中国残留孤児」といわれる人たちが、自分が日本人であると知ったとき無性に日本に帰りたいと思われるのもよく分かることである。

五、日本語を「母のことば」とする「私」

通常私たちは、日本語を「母のことば」として意識された、この「私」のところで生きているのであり、この「私」というものを前提にして「共に」ということを考えているのである。

では、この「私」のところにはどのような問題があるのだろうか。三人の文学者の語るところを通して学んでみたいと思う。

はじめに詩人の石原吉郎の語ることであるが、彼は軍隊に入る前に洗礼を受けキリスト者になり、戦争が終わったとき「ソビエト連邦」に抑留され、そこで二十五年の重労働刑というものを受け、一九五三年にスターリンが死んだことによって特赦で日本に帰ってきた方である。そのシベリアでの抑留生活を通して体験したことを詩人・鮎川信夫との対談のなかで、次のように語っている。

日本については非常に純粋化していたわけですね。判決を受けて、日本との距離が絶望的に遠くなったときに、いっぺんに日本がなつかしくなって、とにかく美しいもののかたまりのようになったわけですよ。そういう純粋培養のような形で、日本という幻想をつくっていたわけですね。ですから、舞鶴に上陸したとき、何もかも汚れてゴミゴミしている感じで、がっかりしました。

それと、私がえがいていた日本は純粋に風景なんですね。ほとんど人間がいないんですよ。富士山とか松林とかそんな風景になってしまったわけですね。舞鶴に上陸して最初にきた違和感というのは、その中に人間がいるということですね。人間がいるということは、つまり人間の生活があるということでしょう。

（『断念の海から』二一〇頁）

ここで語られていることは、私たち日本人が異国に一人投げ出されたとき、生きることそのことが非常に不安定な

ものになるわけであるが、それは、石原の場合は軍隊という組織が解体され一人になってシベリアの強制収容所の苛酷な状況のなかで生きていかなければならないということだが、そのとき幻想された日本の国は「富士山とか松林とか」に象徴される、人間の生活のない美しい風景としての国であったというのである。そういう美しい風景としての日本の国を思い描いて、やっとシベリアの強制収容所での厳しい生活を耐えたということであろう。

この石原の言葉を通してあらためて思い出されることは、川端康成のことである。川端が日本人としてはじめてノーベル文学賞をもらったとき、その記念の講演は、『美しい日本の私その序説』（講談社現代新書）と題されるものであった。大江健三郎が同じようにノーベル文学賞をもらったとき、記念の講演を『あいまいな日本の私』としたのは、この川端を意識してのことである。

さて川端はこの『美しい日本の私その序説』と題された記念の講演を、

春は花夏ほととぎす秋は月
冬雪さえて冷しかりけり

道元禅師（一二〇〇年―五三年）の「本来ノ面目」と題するこの歌と、

雲を出でて我にともなふ冬の月
風や身にしむ雪や冷めたき

明恵上人（一一七三年―一二三二年）のこの歌とを、私は揮毫をもとめられた折りに書くことがあります。

と、二人の仏教者の歌を紹介して始めている。

この川端の記念の講演が語るところを的確に要約することは大変難しいのだが、そのなかで芥川竜之介や太宰治の自殺にふれて、

いかに現世を厭離するとも、自殺はさとりの姿ではない。いかに徳行高くとも、自殺者は大聖の域に遠い。

と語っているにもかかわらず、川端は老いを自らに感ずる七十二歳のとき自死していったのである。

（前同）

さて最後は、中国文学の研究者でもあり小説家でもある高橋和巳のことである。彼は六十年代後半から七十年代にかけて、日本の全国の大学で起こった全共闘運動という「人間で在ることを問う」学生の運動のなかで、大学に身を置くものとして、その問いに誠実に答えようとした人であった。

その彼は四十歳になる少し前にガンで亡くなっていくのだが、遺されていた書き出しだけの小説は『遥かなる美の国』と題されたものであった。そして、それは次のような言葉で始まっている。

私は遠い西方の果てからこの〈地上の国〉へ、はるばると旅してきた。もう二十余年も以前になる。私がこの国に到着するまでの遍歴には、幾度か死を覚悟する拙い命運の歎きをもったものだが、それゆえにこそ、私がふとした偶然から幼少のころに聞いたこの国の風光の明媚、人情の温順敦厚、そして清潔にして礼儀正しい民族性などは、私の内部でほとんど絶対化されていた。事実はどうあれ、たどりつくまでに費やした労苦のかずかずをまったく無意味にしないためにも、この国は無限に美しくなければならなかった。

（高橋和巳全集一〇・二四五頁）

これはインドから日本の国にやってくる人が主人公になっていて、物語はどのように展開していくかは分からないことであるが、高橋和巳も書こうとしていたのが「美の国」というものであったことに驚かされる。

六、「美しい日本の国」

このように石原吉郎、川端康成、高橋和巳という三人の語ることを通してあらためて教えられることは、日本語を「母のことば」として「私」というものを意識した「私」のところに在る、いわゆる「日本の国」は、「美」という

言葉が象徴する国だということである。そして、その国は先ほども述べたことでもあるが、「母のことば」が象徴する世界と一つに溶け合った「私」の存在する国でもあるため、様々な問題を抱えて共に生きることが難しく不安定にならざるを得ない現実の人生にあって、それを意識するしないにかかわらずつねに願われている国でもある。

しかし、その国は石原が語るように、人間のいない国であり、人間の生活のない風景としての国である。それはまた川端が身をもって示したように老いを包むことのできない国であり、そしてまたそれは、高橋が語るようにどこまでも「遙かなる美の国」なのである。

そして「靖国」という言葉で語られる国は、日本語を「母のことば」として自らを意識したものの国のことであるのだから、どれほど「美しい日本の国」と言っても、受け入れることのできないものを持った排他的な国なのである。だから原理的には異質なものを限りもなく排除することによって成り立つ国であるから、いつも脅かされるものを持つことになり、実は「安国」とはとうてい言うことのできない国なのである。だからまた脅かすものを排除するために犠牲が要求される国であり、「美しい日本の国」に自分を溶け込ませることによって、かろうじてその存在を感ずることのできる国であると言ってよいだろう。

そうすると日本語というものを「母のことば」として「私」というものを意識したもののところには、事実として「共に生きる」ということは成り立つことはないのである。

七、「私」というもの

ところで日本語を「母のことば」として意識された「私」というものは、すべての人間に共有されている「私」のことであり、私たちが何の疑いもなくそれを前提にして生きている「私」のことである。とくに現代という時代・社会を生きる私たちがそれを信頼して生きている、デカルトがその著『方法序説』において「真実と虚偽とを見分けて

正しく判断する力[15]」と語る「理性」を持つ「私」というもののことである。

この「私」のことを仏教は「我執」の「私」として明らかにするのである。そして、この「我執」の「私」のところにある課題を『観無量寿経』は「王舎城の悲劇」と語られる事件を通して問題にしている。それはどのような事件であったのかというと、私たちの生の始めにある関係は親子の関係であるが、その親子が殺し合ったという事件である。

この世に生まれてくるとき、親が自分の誕生を望まなかったことを知った阿闍世は、父を殺し母を殺そうとするのであるが、「我が母はこれ賊なり、賊と伴なればなり[16]」と罵りながら自分を殺そうとして剣を振りかざし向かってくる、我が子・阿闍世の悪逆に出会って、はじめて母・韋提希は自らの生きる世界が「此の濁悪処は、地獄・餓鬼・畜生盈満して、不善の聚多し[17]」の世界であることに気づくのである。そして、「願わくは我未来に悪声を聞かじ、悪人を見じ[18]」と仏陀・釈尊に「無憂悩処（憂悩無き処[19]）」を教えて欲しいとたのみ、そこに生まれていきたいと願うのである。

しかし、自分の世界を地獄・餓鬼・畜生の充ち満ちる世界にしているのは、この「我執」の「私」というものであるのだから、善導は韋提希のおちいたった状況を、

此れ夫人、自身の苦に遇ひて、世の非常を覚るに、六道同じく然なり、安心の地有ること無し、此に仏、浄土の無生なるを説きたまふを聞きて、穢身を捨てて彼の無為の楽を証せんと願ずることを明かす。

（『観経疏』序分義・真宗聖教全書一・四八五頁）

と明らかにしているのである。そして、この「無有安心之地」という言葉こそ「我執」の「私」そのものの生きる状況を語る言葉であると言えよう。

ところが親鸞はこの文を

此れ夫人、自身の苦に遇ふて、世の非常を覚るに、六道同じく然なり、心を安ずるに之より地有ること無きことを明かす。此れは仏説の浄土の無生を聞きて、穢身を捨てて彼の無為の楽を証せむと願ふ。

（定本親鸞聖人全集九・八三頁）

と読み、「無有安心之地」の一句を「心を安ずるに之より地有ること無し」と訓みかえて読んでいるのである。どうしてであろうか。

八、現実の生を離れずに

私たちは誰もみな例外なしに何かの言葉を「母のことば」として「私」というものを意識し、その「私」を前提にして生きている。そして、その「私」のところには、同じ言葉を共有する世界と歴史があるのではあるが、この「私」が「我執」の「私」であるため、事実として共に生きていながら共に生きることのできる世界を失い、現実は「無有安心之地」ということになっている。だからここではないどこかにと、共に生きることのできる安心の世界を夢見て現実を浮き足立って生きることになってしまっている。それでは生きることが確かなものにはならないのである。

だからこそ親鸞は、私たちの「私」というものが「我執」の「私」であるため地獄・餓鬼・畜生の充ち満ちる世界になり、そのため「無有安心之地」の世界になってしまっている、この現実の生を離れて生きるということはないのだと言おうとしているのである。

では、私たちの「私」というものが「我執」の「私」であるため地獄・餓鬼・畜生の充ち満ちる世界になり、そのため「無有安心之地」の世界になってしまっている現実の生の直中にあって、なお地獄・餓鬼・畜生を生み出すことのない「私」というものは、私たちのところに、どのようなものとして、どのように生まれてくるのだろうか。

そのことを『歎異抄』第三章は、

煩悩具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。

（定本親鸞聖人全集四・七頁）

という言葉でもって端的に語っているのだが、その課題を荷って発されることになったのが法蔵菩薩の仏国土建立の本願なのである。

その仏国土建立の本願は「無三悪趣の願」、

設我得仏、国有地獄・餓鬼・畜生者、不取正覚。

（設ひ我仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生有らば正覚を取らじ。）

（真宗聖教全書一・八頁）

から始まっている。古来『大無量寿経』は中国の言葉に十二回翻訳されたと言われている。そして現在五本が残っている。その五本の『大無量寿経』の本願の数並びに順序等は違っているが、第一願はこの「無三悪趣の願」である。

このことは何を語るのかと言えば、地獄・餓鬼・畜生の無い国を実現したいというすべての人間の願いに答えようとして、法蔵菩薩が仏国土建立の願を発したのだということである。だからまた人類の歩みは地獄・餓鬼・畜生の無い国を求めての歩みであったと言えるのである。

ところがこの地獄・餓鬼・畜生の無い国を求めての歩みが生み出したものは、また地獄・餓鬼・畜生の有る国であった。だからこそ法蔵菩薩は、第二願に、

設我得仏、国中人天寿終之後復更三悪道者、不取正覚。

（設ひ我仏を得んに、国の中の人天、寿終へての後、復た三悪道に更らば正覚を取らじ。）

（前同）

と願わずにはおれないのである。

このように願うものとまったく反対なものを生み出してしまう私たち人間の在り様が、どうしても解決することのできない課題として現在厳しく問われているのであるが、法蔵菩薩の本願の歩みにおいて確かめられてきたものは、地獄・餓鬼・畜生を生み出すものから解放されることなしに地獄・餓鬼・畜生の無い国はないということであった。そして、そのことを語るものが第十願・「漏尽智通の願」、すなわち、

設我得仏、国中人天、若起想念、貪計身者、不取正覚。

（設ひ我仏を得んに、国の中の人天、若し想念を起して、身を貪計せば、正覚を取らじ。）　（前同九頁）

というものである。

この第十願の「若起想念、貪計身者」のところを、『大無量寿経』の他の異訳で見てみると、「有愛欲者」（『平等覚経』[20]）であり、「皆無有淫泆之心、終無念婦女意、終無有瞋怒・愚痴者」（『大阿弥陀経』[21]）であり、「起於少分我我所想者」（『無量寿如来会』[22]）であり、「離顛倒想堅固修習」（『無量寿荘厳経』[23]）である。これらの言葉を見ても「我執」の「私」というものが地獄・餓鬼・畜生を生み出すものであることがわかる。

九、阿弥陀仏の浄土を依り処にして生きる

ではどうすれば私たちに地獄・餓鬼・畜生を生み出すことの無い「私」というものが生まれてくるのであろうか。それは、

真理は一つであって、第二のものは存在しない。その（真理）を知った人は、争うことがない。

（中村元『岩波文庫　ブッダのことば』一九四頁）

と『スッタニパータ』に語られているように真理（dhamma・dharma・法）に目覚めることによってである。確かに真理に目覚めて仏陀に成った釈尊は「満足大悲人」[24]であり、「於諸衆生、視若自己」[25]の人であった。

ところが私たちは、「常に無量の煩悩の為に覆はれて慧眼無き」[25]ものであるため、結局は真理に目覚めることができないのである。そしてまた、私たちは「煩悩具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるゝことあるべからざる」ものであるため、如何なる手だてによっても「我執」の「私」を離れることができないのである。

ここに親鸞の百カ日の六角堂参籠が象徴する苦闘があるのである。それは突破することのできない鉄壁に向かっての参籠であった。そして、後に親鸞が「和国の教主聖徳皇[27]」と呼びかける救世観音の化身と伝説される聖徳太子のことを思い続けるなかで、九十五日目の暁に次のような語りかけを聞くのである。それは、

行者宿報設女犯
我成玉女身被犯
一生之間能荘厳
臨終引導生極楽

（『定本親鸞聖人全集六・二二七頁）

という「女犯偈」であったと言われている。

「女犯」という言葉があらわす在り様以外にないどうすることもできない悪人の自分自身に対面する親鸞に、逆に私が美しい女性になって犯せられましょう、そして、あなたと生活を共にしていよいよこの世の生を終わっていくときにあなたを導いて阿弥陀の極楽世界へお連れいたします、と呼びかける観音の大悲の声が聞こえたのである。それは私たちがすでに共に生きているといういのちの事実そのものから発せられた声であり、だからこそ共に生きていきましょうと呼びかけ、私たちすべてのものの「本心」[28]を教える声でもあった。

この呼びかけは、阿闍世が、

惟願はくは大王、速やかに仏の所に往づべし。仏世尊を除きて余は能く救ふこと無けむ。我今汝を愍むが故に相勧めて導びくなり。

（『教行信証』信巻・定本教行信証一六三頁）

と勧める、自分に殺された父・頻婆娑羅の声を聞くのにも通じている。

そして、親鸞はこの声にはげまされて、市井に在って「ただ念仏」の旗印を高く掲げて本願の教えを説く吉水の法然のもとを訪ね、また百カ日教えを聞き続けるのであるが、その親鸞に法然は、

たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし。

（定本親鸞聖人全集四・五頁）

と教えるのである。そして、

よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。

（前同）

と語られているように、よき人・法然に教えられるままに南無阿弥陀仏と念仏申して生きんとする親鸞が新しく誕生するのである。そのことを『教行信証』に、

然るに愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す。（『教行信証』化身土巻・定本教行信証三八一頁）

と語っているが、それは南無阿弥陀仏と念仏申して生きる法然の「たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」の教えの言葉を通して阿弥陀仏の「たゞ念仏して我にたすけられよ」の大悲する声を聞くことであったのである。

そのことを、親鸞は「南無之言帰命。（略）是以帰命者本願招喚之勅命也」と明らかにしているのだが、一切を包む真理そのものが、背いて生きる「我執」の「私」を大悲するがゆえに、なんとしてでも真理そのものに呼び覚まそうとして自らを南無阿弥陀仏と名告って呼びかける大悲本願の声を聞いたということである。

だからまた、南無阿弥陀仏をもってする真理そのものの呼びかけは、第十八願・「至心信楽の願」に「唯除五逆誹謗正法」の言葉があり、それを親鸞が、

唯除はたゞのぞくといふことばなり、五逆のつみびとをきらい、謗法のおもきとがをしらせむとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせむとなり。

（『尊号真像銘文』・定本親鸞聖人全集三・四三頁）

と注釈されているように、私たちが何よりも確かなものとしてそれを信頼して生きている「私」というものが、五逆と誹謗正法の「我執」の「私」というものであり、真理に背く罪のものであることを教えるのである。そして、真理に背く罪のものであることを教えられて懺悔するもののところに「十方一切の衆生」の国が開かれるのである。この国が阿弥陀仏の浄土というものである。

だから私たちが南無阿弥陀仏と阿弥陀仏に南無して生きるものになるとき、阿弥陀仏の浄土を依り処にして、

源空光明はなたしめ
門徒につねにみせしめき
賢哲愚夫もえらばれず
豪貴鄙賤もへだてなし

（『高僧和讃』・定本親鸞聖人全集二・一三三頁）

と和讃されているような生を生きることのできるものになるのである。

① 児玉暁洋「浄土・僧伽・教団」（真宗大谷派刊『教化研究』一一一／一一二号・四七頁）
② 村上重良『靖国神社　岩波ブックレットNo.五七』一二頁
③ 真宗聖教全書一・一五～三三頁
④ 前同二六～三一頁
⑤ 安田理深「『願生偈』聴記」（安田理深選集一二・九〇頁）
⑥ 真継伸彦『親鸞』（朝日新聞社）一三五頁
⑦ 信国淳「自と他」（信国淳選集六・一〇二頁）
⑧ 雲井昭善『仏教の伝説』一五四頁

「雪山に身体は一つではあるが、頭が二つある珍しい鳥が棲んでいた。この鳥は、一身で二頭を支えていたので、共命鳥と呼ばれていた。

この共命鳥の一頭は、いつも美味しい果実を求めては健康に留意していた。しかし、他の一頭は、いくら美味の果実を求めても、ちっとも得ることが出来なかった。そこで、つい嫉妬心を起し、自暴自棄のあまり、毒の木の実を食べた。その結果、二頭共に死んだ、という。」

⑨ 『大乗義章』巻第十九（国訳一切経諸宗部一二）
⑩⑪ 『中央同朋会議・報告Ⅱ　親鸞の教えと現代』一〇一頁
⑫⑬⑭ 田中克彦『言葉と国家』（岩波書店）二八頁
⑮ 岩波文庫一二頁
⑯ 『観無量寿経』真宗聖教全書一・四九頁
⑰⑱⑲ 前同五〇頁
⑳ 真宗聖教全書一・七八頁
㉑ 前同一三八頁
㉒ 前同一九〇頁
㉓ 前同二一九頁
㉔ 『観経疏』散善義（真宗聖教全書一・五三四頁）
㉕ 『仏説無量寿経』（真宗聖教全書一・四頁）
㉖ 『教行信証』真仏土巻（定本教行信証二三六頁）
㉗ 『正像末和讃』（定本親鸞聖人全集一・二〇五頁）
㉘ 『教行信証』信巻（定本教行信証一七一頁）
㉙ 『教行信証』行巻（定本教行信証四八頁）